

福州攻防戦（中支）

愛媛県 山本昌夫

私は両親の元に五人兄弟の長男として成人しました。当時は国の政策で子供の多い家庭は表彰に値するとして「産めよ増やせよ」と「大いに奨励」されました。諺に「貧乏人の子沢山」と申しました。我が両親も娯楽も無く、ただ真面目に働き、子供の成長を喜んでいたと思います。

家業は左官職（立派な腕）でした。父はよく申していました。いかに偉い人でも、両親があつてこの世に産まれたのだ。「第一に親に感謝だ」次に世間様にも感謝の礼を忘れるな。そして人間はそれぞれ家に住む。動物なら土地に穴を掘ったり、大木の下などを住家にする。人間と動物の異なるところだ。

人の住居を作るのは「三位一体」と云って、大

工の棟梁が木作りをし、棟上げをする。屋根屋が雨水を断って屋根を葺く。仕上げは俺が、家屋の内・外と肉を付けながら化粧を施す。これでそのような城閣も一般家屋も完成するのだ。「左官は人生には絶対必要な職業だ」と意気まいていました。

私もその感化を受け「人生哲学の一角」を幼少の頃より学んでいたと今更感じています。また私の住む町は漁師町で、西の豊後水道に長く鋭く突き出している佐田岬、北が伊予灘、南は宇和海で漁場としては最高漁場です。特に「関鯖や関鯔」は天下の絶品との事です。なお漁師は気が荒いが、皆さんやさしい良い人ばかりでした。

義務教育修了後、高等科を卒業しました。尊敬する親爺に付いて家業を手伝いながら、青年学校へ五年間、無遅刻、無欠勤でした。卒業時には校長はじめ町の有力者の来賓多数の前で最優秀な成績で表彰されました。勿論のことながら青年学校

では、学科の中に軍隊における「軍人勅諭」をはじめすべての「典範令」「作戦要務令」まで、教育係が熱心な退役古参軍曹だったので充分に教わりました。教訓練は常日頃に家業で鍛えた肉体には至極楽なことでした。

昭和十六（一九四一）年八月頃でした。町役場の兵事係から「昌夫さん、宇和島の公会堂で徴兵検査があるからな」との通知を受けました。待っていたものがようやく来た感じでした。当然の事ながら、徴兵執行官から「山本昌夫、甲種合格」と申し渡されました。この途端に「やれやれ」、これで人生の大きな一つの区切りができたと感じました。

六十年も昔の事です。苦しかった事は忘れて僅かな楽しみが頭の中にあります。一番感動したことは、終戦後、中国正規軍が「蒋介石の命に依り、日本軍将兵に丁重に礼を尽くせ」と云う軍命で、非常に親しみながら、收容所にて取り扱われ

ました。そして上海出港まで不思議な月日を送った事でした。

「昭和十七年二月二十日、丸亀歩兵第百十二連隊、補充隊へ入隊せよ」の令状を受領しました。親戚、友人や近隣の人達に盛大なお見送りを受けて、壮途に着きました。入隊も形通りに行い、兵営に少し馴染んだ頃転属命令でした。いよいよ外地出陣です。いづこかな。

昭和十七年三月十四日、歩兵第二三四連隊へ転属せよ。任地は不明でした。坂出港から乗船出港でした。当時は防諜（スパイ）の關係で船舶が港から外洋へ出て、はじめて任地発表という事でした。自分達は大海原を、僅かな御用船団と、これまた数隻の警備艇にて波頭を蹴り船は進みました。自分は浜辺で育ったから、船酔いもせず、対潜水艦・対航空機の警戒監視任務に付きましました。上海に入港上陸で、船に弱い戦友は「やれやれ」でした。

ところが、すぐ小型船に乗り換えて、さらに上流へ上がって行くのです。揚子江（長江）は海のごとく広い大河です。上流と下流の分別ができなかった。

昭和十七年三月二十六日、入隊以来一カ月余り、坂出を船出してから十二日にして任地に到着しました。中国中支の武昌と云う街です。歩兵第二三四連隊です。現地で初年兵教育でした。自分は青年学校にて基礎を完全に熟知していましたので、他の同年兵とは比較にならず、至極楽天的に勤務してました。でも他国です。ちょっとの油断も禁物で、第一期の検閲も無事終了しました。

中隊長より呼び出しがあり、中隊長室にて「山本、貴様、下士官候補生を受験せよ」と云い渡され、返答無用で「ハイ、山本二等兵、下士官候補生試験を受けます」で一巻の終わりか、いや次巻の始まりだった。その後司令部にて検査、試験がありました。数日後に合格内示がありました。現地南京の下士官学校と内地福山の下士官候補生教

育隊、学校が有るのですが、中隊長は「山本、貴様が合格したら内地の福山へ行かしたる」が現実となって、昭和十七年十月、半年余りで再び内地へ帰ることになりました。

福山の学校教育は実に厳しく、気弱い同期生の中には途中で落伍して脱学し、原隊でなく、他部隊へ行っただとか。自分は現在までの少年期から青年学校、そして初年兵としての諸教練・教育等・特に外地（武昌の歩兵第二百三十四部隊）等々自分としては最高の出来だったと「自画自賛」しています。そしてすべて完了しました。

昭和十八年十月二十日、福山下士官候補者教育隊卒業。「任陸軍伍長 山本昌夫」の誕生です。「命原隊復帰」で丸亀歩兵留守隊へ一時帰隊せよでした。大隊本部において諸業務を担当しながら、初年兵等の教育補として働きました。

昭和十九年七月十四日丸亀歩兵独立第四一大隊が急造で編成されました。この大隊は「赤紙応

召軍人」が主力で、自分の山本分隊には一人の現役兵がいて他は全員四十歳代の妻子の有る老兵分隊でした。全員軍隊は未経験者で、襦袢（シャツ）袴下（パンツ）から軍服の上衣・下衣・軍帽（戦闘帽）巻脚絆（ゲートル）等の着用の仕方から教えないと駄目でした。一人の若い現役兵がいてくれたので助かりました。彼は終戦まで自分の右腕として働いてくれました。

同年同月二十二日、支那派遣軍隷下となる出陣の令が下りました。この時自分は考えました。

「俺は戦死しても一人だ。部下は一人に非ず。涙する者多し。絶対殺しては駄目だぞ」と強く心に誓ったものです。以後の行動はすべて神仏を念じながら部下の命運を祈りました。

昭和十九年七月二十五日、丸亀を出陣しました。門司港出帆、翌日朝鮮釜山上陸、二十九日鮮満国境安東通過、三十一日山海関通過。いよいよ中国大陸です。八月上海に駐留、次期作戦待機。

約六十日余りだった。この期間に補充兵達の戦闘訓練を行いました。特に三八式歩兵銃の一斉射撃と手榴弾の投擲・夜間攻撃並びに敵の夜襲に対する警備警戒等でした。

昭和十九年十月中旬、出動命令にて船舶移送となり、揚子江の上流と想像したのに、東シナ海に出て南下しました。敵の一大勢力が台湾方面を狙っているとの情報が入ったとの事でした。「独立歩兵第四一大隊は、全力を挙げて、福州地区の敵を殲滅せよ」でした。蒋介石の正規軍でした。

昭和十九年十一月初旬のある朝まだき、海上は霧が靄で、まだ遠目の利かぬ頃に、全員上陸用舟艇に分乗し敵前上陸です。自分は老兵分隊を意識し過ぎたために、一大失策を行ってしまいました。

その時舟艇の出発を僚船より一呼吸遅らせて命令しました。そのために他の小隊は全員揚陸し交

戦中でした。我が分隊はいまだ船上です。と船舶工兵の指揮官が「早く降船せよ」と呼ぶので一番に自分が飛び込んだのですが、まだ深く数メートル先でない足が浜に届かぬ。「もう少し陸に着けてくれ」と海中からの叫びにも耳を貸さず「早く下船せよ」の催促でした。勿論僚船は任務完了で母船へ引き上げていました。でもそのため老兵全員に「水く屍」になる一歩手前までの苦しい思いをさせました。後日談、東シナ海の水も日本海の水も同じ味だった、と揚陸後語り合っていました。

何はともあれ無事上陸できて「やれやれ」でした。勿論尖兵中隊が敵を鎮圧していたお陰です。後刻、中隊長から種々話を聴取されましたが、自分の処置については、老兵への労りの心情が「良か、否か」は不問でした。軍隊言葉の臨機応変でしょう。少しだけ船舶工兵を恨みました。以後福州地区は友軍と中国中央軍とが入り乱れての攻防戦に明け暮れました（一進一退）。

昭和二十年五月頃でした。敵の攻撃が一段と激しくなり、敵の空軍も毎日多数飛来し、爆弾や焼夷弾の投下、超低空飛行で機関砲や機銃の乱射です。日の丸の友軍機は一機も飛ばず、爆音はすべてアメリカ軍機でした。友軍陣地の一角が壊滅しました。

本部より転進（撤退・退却）命令が来ました。自分の分隊が最後尾撤収隊でした。蒋介石正規軍が優秀な火器を米軍より譲渡され、十分な弾薬と食糧を持つての攻撃です。友軍は弾薬乏しく、食料も無く、ただ大和魂だけではいかんとも致し難しでした。

これから上海まで、一五〇〇キロを徒步行進です。道無き路を進み、二日も雨が降れば泥濘となり、身体を没する沼地あり、雑草繁藻の丘陵を進み、亜熱帯病に冒されます。傷痕の身に食料も乏しく、ただ気力だけでの行進でした。最後尾の収容分隊ですから路傍に倒れる戦友を見れば、これを励まし、僅かな食料を分け与えて前進の手助け

をし、草むす屍には、茶毘に附する事はできず、左胸のポケットにある貴重品袋に印鑑と鉄胄の上で軍刀で切り落した親指を入れます。そして遺体は野犬に喰われぬように、円匙（小型スコップ）で穴を掘って弔ます。

また、敵の弾丸は前方から来るものでしたが、後方からの攻撃には背を丸めて、特に迫撃砲弾が「ヒュリー！ ヒュロン」と頭上を通過し、前方で炸裂する状況には、今思っても身震いします。老兵分隊だから突破できた難行軍だったと思えます。若い元氣者揃いだったら、暴走したでしょう。自分の意が全員に通じ若い軽機射手もよく頑張ってくれました。全員の協力で、病魔に打ち勝ち、食料難も克服し、数人の戦傷者を助け、この困難な後尾收容作戦を完了しました。

出発以来六十日余りで独立歩兵第四一一大隊は上海に到着しました。道中收容の戦没軍人の霊体を一夜安置して、「屍衛兵（一般のお通夜の事）

を山本軍曹以下山本分隊任ず」と。勿論後尾收容の關係上、全員、誠意をもって奉仕しました。通常の衛兵と異なり、司令、歩哨係（現役軽機射手）歩哨が二人宛着剣立哨、三交代と控えです。

夕方より、いとも懇ろに務めました。東天が白み、全員起床、幹部以下全將兵参列し、真木の上に御遺骨を安置し、各中隊の代表者にて点火されました。神となられし各々英霊に対して「喇叭、国の鎮」が唳々と流れたようでした。炎は中天に登り霞のごとく、立つ煙は東天へと流れ、各々の故郷の地へ、また靖国の御空に還られた御事と察します。

約三十日程経過して八月十五日終戦と云う知らせが来ました。正午天皇陛下の玉音放送が日本全国並全戦線に到達されました。これ以上一人の国民の生命を無駄にはいけない。軍人はすべて、相対国にて武装解除せよでした。

中国正規軍によって我が大隊は武装解除を受け

ました。中国軍は「昨日の敵は今日の朋友だ」、まして同じ東洋民族だ「黄色人種だ」と云って、前述のごとく、至極親切にそして丁寧に取り扱われました（意外だった）。收容所において、自分是他部隊と一緒にされ、分隊長と散り散りに分散せられました。

昭和二十一年二月十五日、上海を出港し、同月二十日に博多に上陸し、二、三日で復員手続き完了。一目散に自宅へ帰りました。私の復員は早い方でした。北の方も南の方も、それぞれ復員まで大変だったとのこと。私は幸運でした。

自宅には幼い弟が一人増えていました。親爺曰く、万一にでも「お前の身代わりにと作った」で親爺と手を取り合って「大笑い」。目出度し目出度しです。全員無事ということとは神仏の御加護の賜物と、あらためて感謝し、いつまでも平和でありますことを念じました。

死 生 観

京都府 芦 田 吉 雄

私は大正七（一九一八）年十二月八日、福知山の芦田家の次男として生まれ、兄と弟の三人の男兄弟と両親の五人家族でした。

昭和十四（一九三九）年ともなると戦時色はますます緊迫し、我が町からも、召集令状が来て出征する兵士の見送り等が見られるようになった。

手に手に小さな日の丸の旗を持った町の人達は「万歳、万歳」と叫びながら駅まで長い行列で送り、出征する者は「男子の本懐之にすぐるものなし」と勇躍戦地に赴いたものでした。我が家でも兄と弟も出征し、兄弟三人が出征兵士となりました。

昭和十四年度におけるわが国の中国大陸の対支政戦略の方針は、前年度に引き続き政治工作に